

# 紀海音考

## —近世上方の文人の素顔—

名和 久仁子

大阪市立大学大学院文学研究科COE 研究員

### はじめに

近松門左衛門は、近世初期において上方と呼ばれた都市部で活躍した最も有名な劇作家であるが、芝居事に一生を捧げた近松とはまた違ったタイプの劇作家も、上方という都市には活躍していた。その一人で、竹本座の近松に対し豊竹座の座付作者であった紀海音という人物について考察してみたいと思う。

### 浄瑠璃史における紀海音

近松とその作品についての研究はかなり進んでいるが、紀海音についてはまだまだこれからという段階である。そこでまず、海音に関する評価や伝記についてまとめておくことにする。

まず海音に関する評価であるが、同時代の評判として、『今昔操年代記』（西沢一風著・享保12刊「日本庶民文化史料集成」第7巻人形浄瑠璃所収）は紀海音の活躍を次のように述べている。

二年つとめ其暮。河内や加兵衛といふ此道の粹方。あやつり芝居におもひ付。是非くはだてんと。豊竹辰松相座本とし。篠の丸のやぐら幕。浄るりの作者紀海音。新作追へし出しければ町中余程御最層の見物おほく

また『竹豊故事』（浪速散人著・宝暦6刊「日本庶民文化史料集成」第7巻人形浄瑠璃所収）には、

其後次第に操芝居繁昌せるに付道具建衣裳等漸々に向上に成別して竹本豊竹両座と成てより東は西に負まじ西は東に勝らんと互ひに励ミ出来益々芝居繁栄し浄瑠璃の作者は種々様々の趣向を工ミ出し…（中略）…併し西か東か一座斗にては斯繁昌もせまじ当時は町中の若い衆豊竹講の竹本講のと号し毎月掛銭を集め置替り浄瑠璃の節進物の入用に仕給ふとかや扱々奇特千萬成御心中益々信仰なざるべし

と伝える如く、豊竹座も竹本座に劣らぬ人気のあったことが窺える。

さらに少し時代が下るが、『反故籠』（万象亭〈森島中良〉著・文化5頃成立「日本随筆大成」新版2期8所収）は、海音の『心中ニツ腹帯』が近松作を凌いで大当たりした時の様子を次のように伝えている。

近松は西の作者、海音は東の作者なれば、敵同志の如く立分れ、新浄瑠璃の趣向など一言半句を通すべきにあらず。然るに西の宵庚申と心中二ツ腹帯とを見れば、いづれも八百屋の女房は善人なるを悪人、仁右衛門は悪人なるを後生願ひに振替て書たる事、孔明と周瑜が手の内に伏といふ字を書きたるが如し。達田弁二云、海音勝利にて豊竹座大当りなりければ、芝居より千日へ石碑を建て供養しなければ、彼八百屋にて大に怒り、夜分、石碑を芝居木戸前へ建させけるを、翌朝、表方の者取退けんと云けるを、却て景色に成べき故、其儘に置べしと、座本越前の差図に依りて、取のけずして建て置きける。此事どつと評判になり大入りしと。

また同じく『反故籠』が、海音の作風について、

門左衛門は人麿の如く孔明の如し、海音は赤人の如く仲達の如し

と評し、『浪速人傑談』（政田義彦著・安政2序「続燕石十種」所収）は、

或老人の説に近松氏は学力厚きにすぎて其名高けれと其作古風にして婦女童蒙の耳に入かたき所あり海音の作はあらたにして能田夫児輩にわかりやすしと語られたりし

と伝えている。

このように海音の作は、高尚な近松作品に対し、趣向の新しさやわかりやすさで市井の人々の人気を博し、時には近松作を凌ぐ評判をとることもあったようである。

浄瑠璃史に登場する紀海音は、宝永4(1707)年暮の豊竹座再興の折に座付作者となったことに始まり、享保8(1723)年の『傾城無間鐘』を最後の作として作者を引退するまでの20数年間に、存疑作を含めると50にも迫る数の浄瑠璃を世に出したことで知られる。それはちょうど、筑後掾(竹本座の創設者である竹本義太夫)亡き後の竹本座存亡の危機を救うべく、円熟期の近松が次々と名作を生み出した時期と重なる。西の竹本座と対峙する東の豊竹座にあって、近松と鎬を削り合った作者が紀海音だったのである。

次にこれまでに知られている海音の伝記について、概要を掲げておこう。

海音の父は、山城大掾を受領した禁裏御用の裕福な老舗菓子舗鯛屋の主であり、松永貞徳の門人として活躍し貞因と号した。9歳上の兄は上方狂歌界の重鎮油煙齋貞柳、叔父は俳人で狂歌にも巧みな花実庵貞富と文芸活動の盛んな一族の中にあつて、海音も幼い頃から漢籍や仏典や和学を修めるなど真面目な勉学態度が窺われるが、若年期の特筆すべき創作活動は見られず、宝永4年豊竹座の座付作者となるに至り、大いにその才能を発揮。竹本豊竹競合する中、近松に伍して次々と新作を生み出したが、妙智火事による芝居小屋や鯛屋の類焼によって、享保9(1724)年余力を残しながら62歳で芝居を引退。それから寛保2(1742)年80歳で亡くなるまでの18年は、閑暇の余戯に俳諧・狂歌に遊んだ。

## 伝記再考

海音の文学活動の中心は、このように専ら豊竹座での浄瑠璃執筆であつたと考えられてきた。

しかし海音が豊竹座の座付作者となつた宝永4年、彼はすでに人生も半ばを過ぎ、45歳になっていた。劇作家への急な転身は、それまでに十分な素養を身につけていなければ、不可能だっ

たであろう。そこで新資料をもとに海音の伝記を改めて調べてみると、従来とは異なった海音像が浮かんできたのである。そのあたりについて今から述べてみたいと思う。

まず、海音のまとまった伝記資料としては、海音没年に出版された追善狂歌集『狂歌時雨の橋』（寛保2年刊 京大顕原文庫蔵）に載る「海音貞峨居士傳」が従前より知られていた。これは海音を直接に知る縁者鳳潭が、海音生前の享保12(1735)年12月に法橋叙位を祝して著したとされ、海音自身の目にも触れたに違いなく、信頼できる資料であるといえる。

しかし、漢文で簡潔に書かれた「海音貞峨居士傳」だけでは知り得ぬ部分も多く、新たな資料の出現が待ち望まれていた。

そこへ阪口弘之教授所蔵の海音追善俳諧集『仙家之杖』乾巻の資料を調査する機会に恵まれ、従来の海音像を改める必要があるという結論に達したというわけである。

『仙家之杖』は、海音の歿翌年(寛保3[1743]年)に出版された追善俳諧集である。その乾巻の序には、海音の親友椎本芳室が認めた「貞峨菴契因法橋傳」と題する海音の伝記が収載されている。

この「貞峨菴契因法橋傳」をもとに、あらためて海音の前半生をたどってみたいと思う。

### ①幼少期

海音は寛文3(1663)年、一説には5(1665)年、大坂御堂前の菓子舗鯛屋の主、榎並貞因の子として生まれた。「貞峨庵主との姓は藤原氏は榎並にして幼より学ひの道にかしこく」と「貞峨菴契因法橋傳」にあるように、山城大掾を受領した禁裏御用の裕福な老舗菓子舗に生まれた海音は、幼少期より一族の文芸活動の影響を受けて学問に勤しんだことが知られる。

### ②惟中門下期

「壮年の比ほひ予と一時翁岡中の講席に交り文筆をともに志を同しう道をいとみなすことになん」（「貞峨菴契因法橋傳」）。

海音の父貞因は、翁岡すなわち岡西惟中が延宝6(1678)年に大坂に居を移して以来、パトロン的立場であったと考えられているので、海音も若年より惟中との付き合いはあったと思われる。しかし、「壮年の比ほひ」という表現から、芳室と共に本格的に惟中の講席に交わったのは、貞享3(1686)年それまで師事していた下河辺長流が亡くなる前後ではなかったかと思われる。貞享5年26歳の年には、惟中編漢詩歳旦集『戊辰試毫』に「稻甘泉（芳室の別号）」と「珍菓亭一指（海音の別号）」の詩が載ることから、どうやらこれ以前に芳室と共に惟中の講席に交わるようになったようである。翌元禄2年にも惟中編漢詩歳旦集『元禄己巳試穎』に「珍菓亭一指」の詩が載っており、さらに元禄3年には一指著『遊仙窟鈔』を自ら刊行している。師に学んだ漢学を単なる教養に終わらせず、28歳の若さで自著を刊行する力量は瞠目に値するが、これは海

音本人の能力もさることながら父貞因の精神的・経済的バックアップがあつてのことであろう。

### ③父との別居

「やゝ年ありて家君貞因居をわかち玉造りの別墅に移さる 此れより遠く江東日暮の雲をへたり独り屋梁に月を望み慕ふ事久し」（「貞峨菴契因法橋傳」）。

元禄8年海音33歳の年の8月25日には、7才ばかりになる一子亀松まる（法名正因童子）を亡くし、悲しみに暮れる海音こと立因に師契沖が「立因が亡き子の為地蔵観音二菩薩のみかた造れるにしろせる詞」（『寶光遺篇』・岩波「契沖全集」第16卷所収）を認めている。挫けそうな息子を叱咤激励するためであろうか。この頃貞因はそれまで同居していた海音に、契沖の住む円珠庵にほど近い玉造の別墅に居を移すよう命じたことがわかる。

### ④契沖門下期

「密乗の沙門契沖大とはわきて倭学に達し万葉の古風をたゞし其博識のほとはよく世の人の知れる所なり貞峨これにたより親炙して時々を競ひ日かけを継ぎ心をひそめあつくこゝろさす事数年の功勞を積み道の蘊奥を暁しめ得たり」（「貞峨菴契因法橋傳」）。

下河辺長流が亡くなるのと前後した時期に、『今井似閑覚書』（西尾市岩瀬文庫所蔵・塩村耕氏『紀海音の伝と文事の補訂』に紹介）にあるごとく、今井似閑・細見成信・海北若沖・野田忠叔らとともに契沖に弟子入りした海音は、円珠庵にほど近い玉造の別墅に転居して勉学に励み、ついに「道の蘊奥を暁しめ得たり」と芳室に評されるほどの境地に到達し、晩年には「諸書の開講門生多くうたかひを納まひをひらき流星の北斗に向ふかことし」（「貞峨菴契因法橋傳」）と述べられる如く、多数の門人を前に講義を行っている。

契沖のもとで学んだ時期のあることは知られていたが、『今井似閑覚書』が示すように今井似閑や海北若沖ら第一級の大家と肩を並べる程の高弟であったとは驚きである。晩年は、契沖のもとで学んだ和学の講義を亡くなる直前まで行っていたことも新しい事実である。

### ⑤出家期

「御家に宿昔の因縁ありけるにや臨濟の百棒をうけ禪林の風味を啜り悦山禪師清海寺に隱居住し時僧と成て侍名祖溪春海の両子と共に随侍し肩をひとしうす此時高節と法號しやゝしはらく掛錫す」（「貞峨菴契因法橋傳」）。

この記述により、海音が僧となり高節と号したのは、法子祖溪の建てた西海寺に、悦山が開山として請ぜられた元禄9(1696)年秋から、再び舍利寺に戻る元禄13(1700)年冬の間のことであったことが知られる。厳密に言えば、貞因が元禄13年の3月23日に亡くなる以前には僧となっていたようである。「御家に宿昔の因縁ありけるにや」とは従兄弟とも伝えられる華嚴宗の僧鳳潭が經典の出版整備に熱意を傾けたこととも関係がありそうで、海音も悦山のもとで經典の出版活動に携わった可能性が考えられる。僧籍にあった時期は長くはないが、還俗後もそうした

活動に関わっていたかもしれない。

⑥俳諧宗匠期

「緇素の浮説のしけきを厭ひ終に賈臈に倣ひ寺を出て吟行花開き花墜るも亦時なるかなそれより師の書したまえる俳諧窟の額を打て十字街頭に居をしめ難波の宗匠と呼しことのもとひなるへし」（「貞峨菴契因法橋傳」）。

悦山のもとで僧となった海音であるが、間もなく父の死を伝え聞いて悲憤慨嘆し、ついには寺を出て吟行する。「吟行」については、鳳潭の「海音貞峨居士傳」においても「放浪于雲山煙霞之間也」と記述されていることから、しばらく引杖漂泊の旅に出たのは確かなようである。諸国を放浪した後、大坂に戻った海音は、俳壇において「難波の宗匠」と呼ばれるほどの活躍をするようになったようである。

海音は大坂俳壇において、「難波の宗匠」と呼ばれるほど活発な活動をしていたはずであるが、従来海音の俳諧活動は、雑俳点や歳旦・追善といった付き合い的な句が多いとして、ほとんど評価されてこなかった。そこで彼の俳諧活動を再検証してみたい。

海音の俳諧活動

「貞峨猶風雅の道に執ふかくして水無瀬卿君の御会席に折々伺候し其身法橋の位階に叙し四方の尊敬も大かたならず」と芳室も述べるように、晩年の海音の法橋叙位は雅文芸とりわけ俳諧の功によるものといわれている。父貞因の嗜んだ狂歌の業を兄貞柳が継ぎ、弟の海音は俳諧を継いだとも伝えられている。そのあたりの事情を海音の甥の永田柳因は、『戎の鯛』（元文2刊「狂歌大観」所収・下線は筆者による）の跋において以下のように伝えている。

ノ　ハ　テ　ニ　ル　ニ　ノ　ニ　ヲ  
我祖父先山-城司-馬貞-因者依-松-永貞-徳有-由-緒-而恒談学-於-誹-諧-并狂歌-又伝-  
古-今物-語等-唯授-一-人-之-秘-然徳死-後貞室次-誹-諧-道-統-依-之-彼秘蜜者室授-於-因-ヨリ  
ハ　ハ　レ　ニ　ニ　ヲ　チ　レ　ニ　ヲ　ヲ  
又誹道者因伝-於室-則其脈相互也-而因有二子則貞-柳貞-峩是也因常呼-柳使-狂歌誦-  
又招-峩授-於誹道-統-夫以-誹-道者從-貞徳-至-貞峩-四-世狂-歌者自-徳至-柳三-代也  
乎然故-司馬貞-因追-先-師貞徳之志-進官-之-仰-望讓-於二子-然柳不-果終于-茲貞-峨悲-  
ノ　ヲ　ニ　ノ　ヲ　ニ　テ　ノ　ノ　ヲ　テ　カ　ン　ヤ　ニ  
父兄之未-遂而去夏幸蒙-於法橋位之勅許-実以歌道之冥-加家面-目何以-加-焉乎  
テ　ニ　カ　シ　テ　ヲ　ル　コ　ト　ヲ　ム　ニ　ロ　テ　ン　ト　ヲ　ニ　テ　ニ　ナ　リ  
於-是愚父貞柳門-流詠-狂歌-賀-之積-机頃梓-氏来乞-彫-刻-之-更難辞題投-彼者-也矣

長生亭 永田柳因識焉

では、海音の俳壇での活動の具体的な様相はどのようなものであったのだろうか。

元禄17年に「海音」の名で俳壇に姿を見せる以前の足跡を辿ってみると、まず寛文11年9歳の折、1月刊の『蛙井集』に「昌因」の名で三句、また7月刊の『難波草』に同じく「昌因」の名で一句入集している。

天和2年海音20歳の春には、惟中が初めて南源に詣し、悦山にも会ったことが知られ、鳳潭が「海音貞峨居士傳」に「弱冠而謁仏日泉。泉示趙州柏樹。雲門須彌之話。而未契。又賦詩呈華藏源。源擊歎云。不図日本有有斯寧馨兒。南岳悦。奇其才。」と記す一件は、このときに海音も同席してのことではないかと思われる。

貞享3年24歳の年の正月には、似船編歳旦帳『貞享三ッ物』に「一指」の名で一句入集している。この年6月3日の師下河辺長流の死と前後して、海音は他の門人たちと共に契沖に弟子入りしたものと思われる。

貞享5年26歳の年には、惟中編漢詩歳旦集『戊辰試毫』に「稻甘泉」と「珍菓亭一指」の詩が、翌元禄2年にも惟中編漢詩歳旦集『己巳試穎』に「珍菓亭一指」の詩が載っており、さらに元禄3年には一指著『遊仙窟鈔』の刊行が見られる。このころ芳室と共に惟中の講席に交わっていたのであろう。

この時期までの俳諧は、父貞因の手ほどきを受けてといった感があり、『蛙井集』も『難波草』も貞因や叔父貞富の句とともに「昌因」の句を載せている。柳因が「又招<sub>レ</sub>峩授<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>誹道<sub>・</sub>統<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>誹<sub>・</sub>道者<sub>・</sub>從<sub>レ</sub>貞<sub>・</sub>德<sub>・</sub>至<sub>レ</sub>貞<sub>・</sub>峩<sub>・</sub>四<sub>・</sub>世」と述懐するように、まさに厳父の指導のもと貞門の道統を立派に継いで貞徳四世となるための修行時代であったようである。また長流門より契沖門に移って和学にも精を出し、芳室とともに惟中の門下となって漢学の素養を磨くなど、父貞因と誼のある各界の第一人者のもとに出入りして、学問の基礎を固めた時代であるといえる。

しかしその父が亡くなって寺を出奔。諸国放浪の後、大坂に戻ってからは、元禄16年41歳の年に刊行された芦笛編『塵乃香』に「<sub>大坂</sub>一指」の名で一句入集している。また同じ年の桃川編『花皿』にも「一指」の名で一句入集しているところを見ると、元禄17年刊の三惟編『元禄十七年<sub>三</sub>物揃』に三惟・芙蓉・諷竹・園女・我亮・呑江らとともに「海音」の名で一座するまでは「一指」の名を使っていたことが知られる。

このころが「難波の宗匠」と呼ばれた、俳諧活動の最も盛んな時期であったと思われるのだが、未知の別号を使っていたのであろうか、盛んなはずの活動の実態は残念ながらまだ十分に解明されていない。興味深いことにこの時期は座付作者となる以前、元禄15年に「けいせい懐子」、元禄16年には「心中涙の玉井」「金屋金五郎浮名額」といった初期の浄瑠璃作品を書いたのではないかとされる時期と重なる。

厳格な父が亡くなり、すでに学問も十分に修めたこの時期、海音は俳諧を手段として交遊範囲をみるみる拡大していく。芝居や遊里などの、いわゆる悪所と呼ばれる世界とも縁が深まっていったようである。

海音が初めて「紀海音」の名で登場するのは、先程述べた『元禄十七年<sub>三</sub>物揃』であるが、以後、享保15年には「貞峨」、元文元年の法橋叙位に際しては「契因」と、次々名を改めつつ、寛保2年に80歳で亡くなるまで、海音は俳諧や狂歌の創作を続けている。

そうした活動の中で海音が俳諧を通して親しく交わり互いに影響を与え合ったと思われる人々を見ていきたいと思う。

## 俳壇における交遊

### ①才麿とその門下

まず、一番に名を挙げなければならないのが椎本才麿である。

才麿は海音より7歳年上の俳諧師で、はじめ西武門、のち西鶴門にあつてしばらく大阪に住み、宗因とも交わった。延宝5年22歳ごろに東下して、言水や芭蕉ら江戸の新興俳諧師と交流するなか、特に其角と親しく、『みなしぐり』などに多く入集した。元禄2年再び大阪に移って来山・鬼貫らと親交し、大阪俳壇に地盤を築いて雑俳点業にも携わり、また摂津国伊丹にも足をのばして門人を育てている。元禄5年には西国行脚に出て、播磨国姫路で『椎の葉』、備前国岡山で『後しみの葉』を著し、また宝永2年と享保元年にも東下して門人を指導。享保元年に来山が没すると来山門の多くが才麿門に移行し、椎門は大阪で最大の勢力をもつようになった。

「貞峨菴契因法橋傳」を著した海音の親友芳室は、この才麿の門人となり椎本氏を継ぐことになるが、海音もこのとき芳室と共に才麿に近づいたものと思われる。もともと延宝5年の東下以前に、早くから才麿と大坂俳壇の重鎮貞因やその息海音との交流があった可能性も否定できない。ともあれ貞門を継承し、貞徳の号「明心居士」にちなんだと思われる「明命」（塩村耕氏『紀海音の伝と文事の補訂』に紹介）の号を使用する海音を「才麿門」と呼ぶには語弊があるが、才麿一門の人々と行動を共にした時期があったのは間違いないようである。大立や雨雨といった才麿一門のおもだった人々とは特に親しく付き合っていた様子も窺える。

### ②伊丹俳壇

才麿が鬼貫と親交が深かったことは周知の事実であるが、海音もまた鬼貫との密接な関係が迎れる。彼をはじめ、岡成・溪風・蜂房・百丸・文人・徳七・好昌ら、酒造で富み栄え高い文化を誇った伊丹の俳人たちとのつながりも当初は才麿を介してだったのかもしれない。

元禄16年海音41歳の年に「大坂一指」の名で一句入集する『塵乃香』は、伊丹の大醸造家鹿島芦笛が才麿の後見で編した伊丹俳書である。伊丹では也雲軒なる俳諧学校を設けて郷党の子弟を指導した池田宗且が元禄6年に没し、鬼貫も元禄16年2月2日に京へ移り、指導的立場の者が不在であった。そこへ勢力をのばしたのが才麿である。この『塵乃香』刊行を皮切りに才麿は伊丹連との親交を深めてゆき、享保3年の才麿編『千葉集』には大勢の伊丹俳人が名を連ねている。

伊丹俳人と海音のつながりは晩年にまで及ぶが、森本百丸の号である白鷗堂を海音も一時名乗るなど、個別に調査していくと思いの外深いつながりが迎れそうである。

### ③蕉門俳人

大坂蕉門の人々との交遊も特徴的である。大坂俳壇で海音の最も近い位置にいた人物の一人に三惟という人がいる。

三惟は、本名菊谷安右衛門（または金や善左衛門）。菊叟・左礼童・三以などの別号も持つ

大阪の富豪である。その三惟と海音は、実に数多くの俳書において連衆となり両者の親密な関係が窺える。こうした実態から、元禄17年以前の海音の俳諧活動についてはまだあまり明らかではないが、少なくとも海音の名での活動が始まってから亡くなるまでの長きにわたって、三惟は俳壇において、海音の最も近い人物であったといえるであろう。おそらく元禄17年以前においても共に活動することが多かったのではないだろうか。

三惟という人は、諷竹・舎羅・天垂・芙蓉らとともに大坂蕉門グループに属して元禄年間に活発な出版活動をしたことで知られており、海音もまたそれらの人々と深い交流があったものと思われる。

蕉門の人々との付き合いは、このグループにとどまらない。伊勢から大坂に移住した園女・山城の智月・尾張の桐葉・美濃の芦文・江戸の凡兆・嵐雪。これらはやはり才麿ともつながりのある面々である。

#### ④江戸俳人

淡々・硯田・五雲・呉竹・五嶺・杉風・周立・洗柯・巽我・素堂・嵐雪・露牛・紹廉・硯田・白松といった多くの江戸俳人たちとの交遊も海音の俳諧活動のなかでは目を引くものがあるが、これらの多くは才麿とも親交の深かった人々であり、還俗後の諸国行脚の折にでも才麿一門と行動を共にした時期があったのではないかと想像される。あるいはまた、契沖のもとで水戸家の依頼による『万葉代匠記』編纂に携わっていた時期に江戸の文人たちとの交流があったのであろうか。

なかでも紹廉は宝永(1704～11)末年ごろ江戸から京に移り、享保(1716～36)初めには大阪堂島に移住し、雑俳の点もした俳諧師で、初号の魚輔を名乗る頃からしばしば海音の連衆にその名が見えている。資産家の紹廉は多才で能書家でもあり、『万葉代匠記』『岷江入楚』『古今余材抄』などを熱心に書き写したことで知られているが、それらはみな海音が契沖の教えを受け継いで門人に講義を行った書物であることから、和学の分野において紹廉は海音の門人であった可能性が高い。また紹廉の門下の白羽・舞雪・几掌・笛十らも、やはり海音と親交のあった人々である。

#### ⑤芝居関係者

最後に、海音をめぐる俳人たちのなかでとりわけ目に付くのは芝居関係者、それも歌舞伎俳優の多さである。

才麿一派の撰集に歌舞伎俳優の俳名に見える例が多いことは知られている。その一例として、元禄17年春刊の大和屋甚兵衛追善俳諧集『梓』は、才麿を巻頭に伴自・園女・三惟・白松・千々・如黛・里圃・花睡・喬古・芦角・素臺・李喬・畔麿・海音・諷竹による追悼の発句が並び、次に素納・如艸・諷竹・如黛・里圃・千々・白松・執筆・海音の百韻、そして2月の月忌に献詠した山下正勝(又四郎)・吉澤孝玄(初世あやめの次男か)・嵐雅木(三十郎)・秋田梅旦(彦



四郎)・松野遠柳・滝川柳水・篠塚熊角(次郎右衛門)・松永由香(六郎右衛門・甚兵衛の従兄弟)・京大和や生輔(藤吉・甚兵衛の息子)ら役者達の句、最後に生重こと甚兵衛と婿の如艸が元禄7年に巻いた両吟を載せている。

海音が演劇の世界に身を投じるきっかけとなったのは、このような俳諧を介しての俳優達との交遊なのではないだろうか。海音と俳諧を通じた交遊が認められる芝居関係者の名を、素性が判明したかぎりにおいてまとめてみた。俳名(芸名または作者名)を順に挙げる。

蛙桂(安田蛙桂・中邑阿契)・蛙文(安田蛙文)・一口(姉川みなと)・一鳳(三世芳沢あやめ)・逸風(藤川平九郎)・雅木(初世嵐三十郎)・魚江(三榊徳次郎)・鯨児(浪岡鯨児)・好玄(初世山下又太郎)・茶谷(四世片岡仁左衛門)・左流(岩井半四郎)・志山(初世市山助五郎)・春水(二世芳沢あやめ)・松鶴(山下次郎三)・松洛(三好松洛)・如阜(初世瀬川如阜)・如艸(大和屋甚兵衛の婿)・千四(長谷川千四)・千前(初世竹田出雲)・千蝶(為永太郎兵衛)・宗輔(並木宗輔)・洞笙(藤井花松)・都夕(嵐小式部)・栢莖(二世市川団十郎)・巴江(嵐松之丞)・風光(初世三保木儀左衛門)・笛十(春草堂)・文流(錦文流)・里虹(初世山下金作)・路考(瀬川菊之丞)

ここには浄瑠璃作者の俳名も見出せる。安田蛙桂、安田蛙文、浪岡鯨児、三好松洛、長谷川千四、初世竹田出雲、為永太郎兵衛、並木宗輔、春草堂、錦文流らである。

また海音追善俳諧集『仙家之杖』には、芝居関係者と思しき人々による、次のような一連の句が載っている。

#### 追悼

源氏の講読今聞やうに覚て

時雨来ていとゝ鼻かむ法の橋	市山 志山
時もけふきのふしくれてはや時雨	風光
駒下駄の蹴られ残りや犬董の花	左流
目には拝耳には残る菊の霜	其龍

湖月にてよみ給ふ講席もあり

入月や時雨の露に琵琶の海	蛙桂
明德にまかひ道なし冬の月	里虹

#### 同

神力や久遠の無化にかへり花	八木 雅木
雛鳥や来鳴鶯法の御名	有楽
山茶花や手向の雫法の橋	遊糸

五十日といふ日

うつり行夢もやはやき水仙華	好玄
手折らせていさや供えん冬牡丹	一鳳

高津の庵に詣つる毎に針と糸とのちなみおかしく物かたり給ひ且洞笙  
春水には伊勢源氏の奥深きまで伝へぬると人にもいひわたり給ひしと  
なん洞笙さへむなしくなりぬ其秋の末なやめる事ありとのしらせに驚

て折々毎に枕をたすけるに今はといふ御時は心みたるゝはかりなり  
しをも潘子とともに水まいらせける棺を送りて後も発句を備へ哥仙を  
つゞけ猶又在世に餅を好給ひし事を思い出で  
三つかひとつなとやあのこの餅供養 春水

「源氏の講読」「湖月にてよみ給ふ講席」「洞筥春水には伊勢源氏の奥深きまで伝へぬる」などの記述から、おそらくここに名を連ねる人々は、和学の分野では海音の門下なのであろう。

## おわりに

紀海音といえば浄瑠璃作者としての活動が彼の生涯にわたる文芸活動の中心であると、従来考えられてきた。確かに近松門左衛門と競い合うことのできる筆力を持っていたのは事実であり、その数多くの作品は未だ色褪せることなく後世の作品に襲用されて命脈を保っている。

しかし、海音の一生の中で浄瑠璃界に身を置いた一時期はどちらかというところには放蕩と映る出来事であり、彼本来の姿は父の期待を背負いつつ勉学に励み、ついには父や兄の果たし得なかった法橋叙位にまで至る努力と才能の人であった。そういう意味で貞徳四世を継ぐべく幼少期より始められた俳諧こそ彼の文芸活動の中心であったと言ってよいであろう。

海音にとって俳諧は継ぐべき道統であると同時に、先に開催されたCOE国際シンポジウムの折の芝原宏治教授の言葉を借りて言えば、「多様な創造的遭遇」を可能にする手段でもあった。海音は俳諧を通じてより多くの人々と出会い、異なった世界と出会うことで、更なる創造のエネルギーを生み出して行ったのである。

上方という都市部を拠点に活動し、俳諧という手段によって多様な創造的遭遇を次々と可能にし、和学・漢学・仏典・狂歌・俳諧・医学などあらゆる学問に精通する才能とそれを支える経済的余裕と文化的家庭環境に恵まれた人物。紀海音という人はまさしく都市に生まれ、都市に生き、都市文化を創造し続けた、近世上方の一文人と言っても過言ではないだろう。

## 参考文献

- 吉永孝雄「紀海音伝の研究」『国語と国文学』昭和11年5月  
祐田善雄「海音の時代」「紀海音論」『浄瑠璃史論考』昭和50年8月  
塩村耕「鯛屋一族の文芸活動の諸問題」『近世文芸』昭和61年6月  
長友千代治「紀海音の文学活動」『国語と国文学』昭和64年2月  
塩村耕「紀海音の伝と文事の補訂」『東海近世』平成7年11月  
辛島啓子「椎本才麿年譜稿」『叢』昭和44年11月  
上野洋三「岡西惟中年譜稿」『国語国文』昭和45年11月